

### 宮澤賢治と自己犠牲

和田, 康友 / ワダ, ヤストモ / WADA, Yasutomo

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

54

(開始ページ / Start Page)

50

(終了ページ / End Page)

58

(発行年 / Year)

1996-07-13

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019894>

# 宮澤賢治と自己犠牲

和田 康友

## 一、はじめに

宮澤賢治の作品と自己犠牲的精神の関係については、既に多くの人々によって論じられてきた。確かにそれほど互いの関係が深いと言えるのだが、近頃では二つを切り離して、純粹に作品論を展開する人も増えてきている。また、その一方で、自己犠牲が論じられるケースも根強くあり、その場合、その徳性を肯定するか批判するか論点が絞られていることも少なくない。即ち、作品の中で自己犠牲的精神がいかに発現し、機能しているか、そしてそれを受け入れるべきか否かということに終始しているケースが多く、どちらかと言うと作品論から離れた自己犠牲論（つまり自己犠牲そのものを肯定すべきか否か、という論点に終始したもの）が中心となっている感がある。だが、賢治の作品をよく吟味してみると、確かに自己犠牲は重要な位置を占めているにしても、そこにはある種の特殊性が含まれていることを認めざるを得ないのである。それはどのような特殊であるのか、まずその点について私なりに検証してみたい。

## 二、「よだかの苦惱」、そして二つの求心力

童話『銀河鉄道の夜』の主人公ジョバンニは親友カムパネルラに、次のようにつぶやく。

僕はもうあのさそりのやうにほんたうにみんなの幸のためならば僕の中からだなんか百べん灼いてもかまはない。

ここで言う「さそり」はジョバンニ達が銀河を走る鉄道の車窓から見た燃え盛る赤い炎のような星のことだ。自らの食糧として生き物の命を奪ってきた今までの罪を、死の直前に懺悔したさそりが天に召されて誕生したのである。懺悔の際、彼が捧げた祈り、まことのみんなの幸いのために私の体をお使い下さい、という祈りが天に通じて生まれた奇跡であろうか。このさそりの祈りと、自らの体を燃やすことによって闇夜を照らし続ける彼の姿には、まさしく自己犠牲的精神が発現している。このエピソードのみにとどまらず、自己犠牲はこの作品の中で重要な位置を占めている。

ところで先のジョバンニの台詞とそのもとなったさそりのエピソード

ソードは、すぐさま、賢治の初期の名作として名高い『よだかの星』の、醜い、しかし心の優しい鳥よだかを連想させる。よだかはたか（鷹）の名を持つが、彼はむしろ蜂すずめやかわけの仲間であった（作中では「兄弟」であると語られている）。非力で嫌われ者のくせに「鷹」を名乗ることから本家の鷹の怒りを買ひ、改名を迫られる。さもなくばお前を殺すぞ、と。鷹に「死」を突き付けられて、初めて自分もまた食糧として罪のない虫達を「死」に追いやってきた事を憂い、「弟」のかわけみに別れを告げ、遠い夜空の彼方へと旅立つのである。体に無理を強いた大空への飛翔の結果、彼は遂に燃え盛る一つの炎の塊、輝く星となって昇天する。そしてその星は今でも燃えている、という。つまりよだかはあのさそりと同様、生まれ変わる事によって闇夜を明るく照らし続けているわけだ。ただし、そのことに気づく者は誰一人としていない。この事実はよだかにとって、とても重要な意味を持つ。

まだ鳥だった頃、彼は溺れかかった雛鳥を助けてやったこともあった。しかしその雛鳥の親は彼に礼を言うどころか、むしろ彼に対して一層の嫌悪感を募らせる。そこにいる誰もよだかという名の鳥が内に持っている存在価値を認めようとはしなかった。彼が星へと転生した結果、よだかという名の鳥がこの世から姿を消すことになる。しかし月や他の星々にまぎれて闇夜を照らしているとしても、そのことにありがたみを感じる者などそうはいまい。ましてや生前に誰にも価値を認められなかった彼が、今また人知れず美しい星へと生まれ変わったところで、そこに一体どのような意味があるというのか。一方、さそりの場合についてはどうであろうか。誰かに認

められないどころか「あのさそりのやうに……」なっても構わないとまでジョバンニに言わせているのである。一見するとそっくりなこの二つのエピソードは、しかし誰かにその存在価値を認められているか否かという点で違いが出てくる。

誰にも認められないという表現を用いたが、ただし、よだかにはかわせみという「兄弟」、唯一の仲間がいた。人助けをしても受け入れられなかった彼に対して、どこにも行くな、と引き留めようとした弟の存在は本来なら重要な意味を持つはずである。何故ならば弟の説得は、他の誰に認められなくても彼にとって兄の存在が必要であったことを物語っているからである。にもかかわらず、兄はそんな弟の説得を聞き入れることもなく彼方へと旅立ってしまった。彼の世の中に対する憂いはそんなにも強いものだったのであろうか。実は彼の憂いは、自分の価値を認めてもらえないということに加え、もう一つ重要な要素によって支えられているのである。即ちそれは、生きて以上誰かの命を奪わずにいられない宿命であり、多くの賢治研究家達が「生存罪」と呼んでいるものだ。菜食、粗食主義にこだわった晩年の賢治の行動を通して「生存罪」という概念が、彼自身にとってとても大きな意味を持っていたであろうことが覗える。『フランドル農学校の豚』『ピザテリアン大祭』『鳥の北斗七星』などを代表とする数多くの作品に「生存罪」が顔を出し、いずれの場合も重要な位置を占めているのを見てもそのことは明らかであろう。「生存罪」に対する苦悩が賢治童話に現れたとき、それは時としてどうすることもできない程の「力」を持って君臨する。『よだかの星』もその例に漏れない。このどうしようもない「力」に取り込まれてしまったよだかに対して、かわせみが行った説得はあまりに

も無力であった。もし、よだかの苦悩がただ自分の価値を認めても  
らえないという事実のみに依拠するものであったら、その弟の言葉  
によって彼は或いは思い止まったかも知れない。しかし彼は「生存  
罪」という、自分が生きている以上避けることもできなければ償う  
こともできない罪に気づいてしまったのである。いったんその観念  
に捕われてしまうとなかなか抜け出すことができない。ただし、こ  
の罪悪感にとりつかれた人の多くは、自分が生きていく以上どうす  
ることもできない罪であるが故に、結局のところそれ以上悩むのを  
やめてしまう。その強迫観念から逃れるために自らの生きる権利を  
放棄してしまうというのであれば、それこそまさに本末転倒だから  
だ。あらゆる生命体にとって自らが「生きる」ことこそが最重要で  
ある。そのことに異議を唱える人はいまい。しかし、仲間から存在  
価値を否定されているよだかは、その自らの「生」に異議を見出せ  
ずにいる。彼が罪悪感の呪縛から逃れ得なかったのは、もちろん彼  
の天性の優しさによるところも少なくなかったであろうが、何より  
もそのこと、即ち自分が生きていることの重要性に説得力、或いは  
実感を持ち得なかったことが、一番の理由なのではないか。

つまり、「生存罪」による罪悪感と、自らの生に意義を見出せずに  
いる悲しみとは彼の中で互いに切っても切れない関係にあると言え  
る。そしておそらく両者は相乗効果を生みつつ出口のない苦悩の中  
でのたうちまわる彼に拍車をかけてしまうのである。さそりの場合、  
「死」は「飢え」という生理的(物理的)現象として現れたが、それ  
に対してよだかはあたかも何かに引き寄せられるかのごとく「生」  
の営みから逸脱してしまった。先ほど私は「生存罪」に対する苦悩  
が時にどうすることもできないほどの「力」を持って賢治童話の作

品世界に君臨する、と書いたがそれは先の相乗効果によって更に強  
大となっていく。そしておそらくこれこそが彼を「生」の営みから  
引っぱり出した張本人に違いない。では、その「力」の行く先は果  
たしてどこなのであろうか。「死」か、闇か、それとも絶望であるの  
か。いずれにしてもベクトルの属性は「生」の営みにとって「負(マ  
イナス)」であることには違いない。

さて、よだかの憂いを支えていた二つの要素のうち、「誰にも存在  
価値を認めてもらえなかったこと」が類似したさそりのエピソード  
と区別し得る大きなポイントであった。さそりには、そのことに對  
する苦悩がなかったからこそ、「みんなの幸いのため」に祈ることが  
でき、また自らの身体を捧げることができたのだともいえる。そし  
てそのさそりの祈りが、先ほど引用したジョバンニの「僕はもうあ  
のさそりのやうに：」という台詞につながってくるわけである。こ  
の、自己犠牲的精神の発現が見られるさそりの祈りやジョバンニの  
台詞は、一見するとよだかが抱えていた苦悩とは無縁であるかのよ  
うでもある。しかし、さそりのエピソードをよく見直してみると、  
彼にはよだかの憂いを支えていたもう一つの重要な要素、「生存罪」  
に対する苦悩の痕跡が認められる。自らの「死」を目前にして、そ  
れまで自分が犯してきた殺生を悔いる点、そしてその悔いが星への  
転生に大なり小なり関わりを持つ点で両者は共通しているのでは  
ある。その意味で、彼がよだかと同様、生の営みから逸脱した存在と  
しての「星」へと転生したという事実は非常に意義深いことである。

更に、次の引用文を見ていただきたい。  
「何かご用でいらっしやいますか。あなたはギルダさんでせ  
う。」

…(略)

「先生どうか私のこゝろからのうやまひを受けとって下さい。」

…

「うやまひを受け取ることは、あなたもおなじです。なぜそんなに陰気な顔をなさるのですか。」

「私はもう死んでもいいのでございます」

「どうしてそんなことを仰おっしゃるのです。あなたはまだまだお若いではありませんか。」

「いゝえ。私の命なんか、なんでもないのでございます。あなたが、もし、もつと立派におなりになる為なら、私なんか、百ペンでも死にます。」

「あなたこそそんなにお立派ではありませんか。あなたは、立派なお仕事をあちらへ行ってなさるでせう。それはわたくしなどよりはるかに高い仕事です。私などはそれはまことにたよらないのです。ほんの十分か十五分か声のひびきのある命です。」

…

「けれども、あなたは、高く光りのそらにかゝります。すべて草や花や鳥は、みなあなたをほめて歌ひます。私はたれにも知られずおほ巨きな森のなかで朽ちてしまふのです。…(略)先生。私をつれて行って下さい。どうか私を教えてください。」

これは童話『マリヴロンと少女』の主人公である歌手のマリヴロン女史と少女ギルダとのやりとりだが、注目すべきは少女ギルダが、あなたが立派になるためなら私など百ペンでも死にます、と、まるで前述のジョバンニのようなことを言っている箇所である。ただし

前後をよく吟味すると、それが純粋な奉仕精神から生まれたというよりはむしろ、自分などは取るに足らないつまらない者であるのでせめて人々の役に立つように使われたい、とでも言いたげな、自己否定や不安、迷いのようなものから生み出されていることがわかる。その、自分自身に存在意義を見出せずにいる彼女の哀れな姿は、前述の「よだか」のそれと重なり得るもので、つまりギルダの発した「私など百ペンでも死んでもいい、という台詞は「よだかの」苦悩の影をどこかで引き摺っているとさえ言えないであろうか。もしそうだとすれば、このギルダの台詞と酷似しているあのジョバンニの台詞、そしてその台詞のもととなったさそりのエピソードにおける自己犠牲的精神にも当然疑いの目が向けられるはずである。即ち、ここにおいてもまたさそりの自己犠牲的精神と「よだかの」苦悩の接点が見出してしまうのである。さそりの祈りやジョバンニの台詞に見受けられる自己犠牲的精神と「よだかの」苦悩を関連づける資料として、この『マリヴロンと少女』の他にもう一つ、『鳥の北斗七星』が挙げられる。ジョバンニの台詞と酷似したものが、ここにもまた認められるのである。この物語の主人公である「鳥の大尉(後に少佐へ昇格)」は文字通り軍人だが、しかし彼は「憎むことのできない敵を殺さ」ずに済む社会が実現することを切望し、それが叶うなら自分のからだなど「何べん引き裂かれてもかまわないと考えている。彼が「敵」と戦わなければならない理由が本文では明らかにされていないため、彼の殺生という行為が果たしてよだかの場合のように不可避のものであるかについては疑問だが、少なくともその行為を憂える心を持つことにおいては共通している。その行為を憂える心とは、即ち「生存罪」に対する罪悪感に他ならない。『マリヴロンと

少女』の例に続き、さそりの自己犠牲、ひいては「…のためなら自分の身体なんてどうなってもいい」という自己犠牲的精神がここにおいてまた「よだか」的苦悩の側面と出くわすことになる。

既に明らかのように、賢治の童話に頻繁に出てくるあの台詞の中の自己犠牲的精神には、なぜかいつも「よだかの苦悩」の影が見え隠れする。つまりその自己犠牲的精神の背後には、よだかが苦悩のあまりに「生」の営みから引つ張り出されてしまったこと、換言すればよだかを「生」の営みから引つ張り出してしまったあの「力」が、多少なりとも働いているのだと考えられる。さそりやジョバンニ、ギルダラを自己犠牲へと駆り立てる背景には、実は彼らが無意識に「死」を求めているという事実が隠されているのかも知れない。即ち、生きていることで生ずる罪悪感や苦しみから逃れるための捌け口としての「死」である。

ただし、彼らはよだかの場合と違って意識的には「死」を望んでいるわけではない。特に、ジョバンニは銀河を旅することによって得たさまざまな出会いや体験が彼を勇気づけてくれているし、ギルダは先に引用した会話文からも覗い知れるように、マリヴロンに対する憧れを抱いている。彼女が、人々を含む自然の全ての事象に潤いを与え、自らも全ての事象に賛美され称えられるマリヴロンに憧れを抱くという事実は非常に重要である。その憧れは自分の要求ばかりを一方的に述べてマリヴロンを困らせている彼女の関心が、しかし自分のみに向けられている訳ではないことを物語っている。そしてそれはまた、よだかのように誰にも認められずにいる現状をただ嘆いているだけではなく、更に一歩進みたいという意識が彼女の中に芽生えつつあることをも示している。

この自然や仲間との一体感、共生、またはそれへの志向は、賢治の童話世界に一貫して流れるテーマであり、『かしはばやしの夜』『鹿踊りのはじまり』『雪渡り』など多くの作品にも顕著に見られるものである。ギルダやジョバンニ達にもその志向は働いており、ともすれば「死」へと向かうもう一つの志向から彼らを危ういところで立ち止まらせている。賢治童話には、よだかを「死」へと導くような強力な「負」の力と、その一方で人間を含む全ての「生」の営みを肯定しようとする力強い志向が存在するのである。或いはこちらがメインで、「死」へと向かう意識はその（自然界のさまざまな生の営みの）共存への願いが叶わない現状からくる絶望感から引き起こされるものなのかもしれない。ともあれ賢治童話にはまるで逆の性質を持つ二つの強力な求心力が働いている、ということが言えそうである。その磁場に取り込まれ、揺さぶられた者達が、自己犠牲的精神に支配されるのではないか。例の「…のためなら自分の身体なんてどうなってもいい」という台詞を発する者は、皆「よだかの苦悩」に縛られる反面、確かに万人（「人」に限らないが）の幸せを欲し、探し求めている。彼らの口から「ほんたうの幸」「みんなの幸い」という言葉がしきりに漏れるのを見ても明かであろう。そしてまた「万人の幸せ」への志向の原動力は、「（誰かに）与える」という性質を持つ純粋な奉仕精神ではなく、むしろ「求める」という性質を強く帯びたものであることも見逃せない。例えばジョバンニは例の台詞を発した後、すかさず「けれどもほんたうのさいはひは一体何だろう」と、疑問を投げかけている。この真実への探求心こそがその本質なのではないかとさえ思えてくるのである。

さて、賢治童話における自己犠牲的精神は、純粋な奉仕精神など

に支えられているわけではないことがわかった。しかし、そもそもその「自己犠牲」なるものを果して賢治は絶対視していたのである。そしてそれは彼が生涯を通して求め続けていた理想の到達点であったのだろうか。

### 三、ブルカニロ博士の削除を巡って

先に、賢治童話に現れる自己犠牲的精神は皆「求める」性質を強く帯びると述べたが、それが顕著に現れた場合、むしろ求道精神と呼んだ方がいいかも知れない。特に、「ほんたうの幸せ」を探し求める者達の物語とも言うべき『銀河鉄道の夜』などはそう思わせるのである。

『銀河鉄道の夜』は、賢治の手によって幾度にも渡る修正、改稿がなされた作品である。その過程で求道精神はより確かな形をもつたものへと変貌していく。例えば、友を見失って悲しみにくれるジョバンニの前に突如として現れ、彼の進むべき道を諭したブルカニロ博士が、改稿の過程で次第に饒舌になる事実などは、求道精神の明確化と深い関係があるだろう。実際、博士のアドバイスはジョバンニの求道精神に大きな影響を及ぼすはずのものであった。ところが、最新稿では博士の存在が跡形もなく削り取られてしまっているのである。この事実は一体何を意味するのであるだろうか。

求道精神の明確化とともに目立つようになったのは、主人公ジョバンニが持つある種の「暗さ」である。彼が実は級友達に除け者にされ、残酷な冷やかしを受けていたこと、そしてその原因が彼の家庭に深く根差していること（父親の仕事の内容と、しかしその仕事が必要ならば生きていくことができないほど貧しい家庭に生まれた育

ったこと）などがわかるエピソードが、後に追加されるようになる。彼の背負った暗さや悲しみが顕著に描写されるようになった理由はおそらく、「ほんたうの幸せ」なるものにこだわっていたことについて説得力を持たせたかったからではなからうか。例えば『グスコードリの伝記』では過去のエピソードを綿密に描くことによって求道精神に説得力を持たせ、強調させることに成功している。『銀河鉄道の夜』においてもその試みが成功していれば、ジョバンニの求道精神は作品の中でより強調されるはずである。しかしこの場合、彼が内に持っている暗さがあまりに強く作用しすぎてしまったようだ。

ジョバンニが不当な理由で仲間から侮辱されているという設定は「よだか」と共通するものであるが、彼にはしかし親友と呼べる仲間がいた。その親友カムパネルラは、彼の痛みをわかってやれる分、前述のよだかに対するかわせみの存在よりも「心の支え」としての役割がはるかに強い。しかし、その親友ともいつか別れなければならぬ運命にあった（後になってわかることだが、カムパネルラは溺れかけた級友を救うため、ジョバンニとともに銀河を旅する前の時点で、既に命を落としている）。彼にとつて友を失うということは悲しいだけでなく、自分の存在を支えてくれた唯一の理解者を失うという二重の打撃を意味する。ここで初めてブルカニロ博士が彼の前に姿を現わすわけだが、彼の受けた痛みの激しさを見ても、博士の言葉がこの時の彼の胸に響くものとは考えにくい。彼の持つ「暗さ」が強く作用しすぎてしまったと言ったのはこのことで、そして博士に励まされただけで彼がもとの求道精神を取り戻していく物語展開にはどうしても無理があると言わざるを得ない。改稿を重ねる

上で博士がいかにも饒舌になろうと、しよせんそれは「言葉」の域を出ない。抽象的な「言葉」が、ジョバンニの味わった具体的な「体験」にかなうはずがないのである。

或いは博士が饒舌になっていったことがかえって仇となったとも言えるかも知れない。最新稿のラストは、「ジョバンニはもういろいろなことで胸がいっぱいでもなんにも云へず」に、ただ父親が帰ってくるという朗報と牛乳を病身の母のもとへ届けてやることだけを念頭に我が家へと急ぐシーンで締め括られている。その「いろいろなこと」という言葉が示すように、彼が銀河旅行で得た様々な体験、つまり様々な出会いや別れ、心の成長と悲しみ、といったものは本来多様な方向性を持つものであつたはずである。しかし賢治はそれらのものを博士の言葉で急ぎ足に総括しすぎたきらいがある。例えばカムパネルラとの別れについてであるが、この時のジョバンニに必要なのは、親友の「死」が持つ意味を、自らの求道精神と切り離して冷静に見つめ直すことと、その為の「時間」であるはずだ。しかし博士は、彼にその為の時間を与えるどころか、次のように急ぎ立ててしまう。

おまへはいつたい何を泣いてゐるの。(略)

：もうカムパネルラをさがしてもむだだ。：だからやつぱりおまへはさつき考へたやうにあらゆるひとのいちばんの幸福をさがしてみんなと一しよに早くそこに行くがいい。：お前は夢の中で決心したとほりまっすぐに進んでいくがい。

「夢の中で」の「決心」とは例の、あのさそりのように自分のからだなど百べん灼いてもかまわない、という台詞のことを指すのだが、見方を変えれば博士の言葉は彼を自己犠牲へと駆り立てている

ようでもある。例えそうでなかったとしても、カムパネルラと共有することで培ってきた「生」へと向かうベクトルが、彼が「生」の営みから退いてしまったことでゆらぎ始めているのである。そんなジョバンニに対してさそりの自己犠牲を連想させるような博士の助言は果たして適切と言えるであろうか。「生」への求心力を著しく欠いた求道精神の矛先を、自己犠牲へと向けることがないとは言えない。

改稿前のラストシーンには、「博士ありがたう、おっかさん。すぐ乳をもって行きますよ。」という台詞があるが、この時点でのジョバンニには、「いろいろなこと」があつて「なんにも云へず」にいた最新稿の彼とは違って、今なすべきことがはっきり認識されていたようである。そんな彼にとつて母親のもとへ牛乳を届けてやるという行為は、博士の導きによつて取り戻した求道精神の実践の第一歩だったのかも知れない。だが賢治はここまで育て上げてきた求道精神を犠牲にしてまで最終的には作品の持つ「いろいろな」方向性を確保することを選んだ。ただし、もし改稿前の求道精神が博士の導きによつて自己犠牲的精神に取り込まれる方向に進むものであつたとするならば、それは壮大な銀河旅行の矮小化を意味することに他ならなかつたであろう。「やさしいセロのやうな」美しい声を持ちながらその一方で求道精神の権化とも言うべき特質を持ち合わせた、この一見するといかにも賢治童話的なブルカニロ博士の存在は、しかし『銀河鉄道の夜』の中においてひどく違和感を与える存在となつてしまつたようである。賢治はそんな博士の存在を抹消することで「いろいろな」方向性の中から結局ジョバンニがどのような道を選び進むのか、その答えを彼自身の手で、そして彼の手を通して読者に、



最終的に委ねることに決めたのかも知れない。

### 結び・自己犠牲からの前進

さて、例え結末を読者に委ねたとしても、なお作品は問題を残している。即ちブルカニロ博士とのやりとりが削除されてしまったため、成長しつつあったジョバンニの求道精神が最終的にどのような進歩したのか、彼が友との辛い別れを経験したことでのどのように成長したのか。それらを読者に語らないまま幕を閉じてしまうという問題である。つまり「一人の少年の成長を追った物語」という視点からすると、この作品は尻切れトンボの汚名を免れない。しばしば「未完の傑作」といった形で紹介されることがあるのもそのためである。他の作品と比べてみるとそのことがよりはっきりする。

賢治童話の中で、「二人の少年の成長を追った物語」の代表作と言えば、『グスコープドリの伝記』が挙げられるのではないか。厳しい自然条件と貧困の中で少年期を過ごしたグスコープド리는、やがて人々の暮らしを豊かにするために学び、働き、そして最後には人々のために命を落とす。その姿は前述のカムパネルラとオーバールアップするが、「献身」ぶりはこちらの方が徹底している。この作品もまた『銀河鉄道の夜』と同様に賢治の手によって何度かにわたる修正が施されたが、ただし公に発表された点で異なる。つまりこの時点で「完成」していたことになるわけで、確かに作品は様々な問題を含みつつも、「献身」というテーマで貫かれており、主人公のグスコープドリがそのように献身的な人生を歩むことになったきっかけも丁寧に描かれている。彼の生き様は農民のために尽くした晩年の賢治の姿と同一視され、この作品にこそ賢治の理想が集約されている

と思われることもしばしある。ただし、テーマが一貫していること、作品が立派な「完成」品であることは、文学作品において必ずしも最重要であるとは限らないはずである。故にそれらのことのみを根拠として『グスコープドリの伝記』が「未完」の『銀河鉄道の夜』より秀でていると結論づけるわけにはいかない。

先に、『グスコープドリの伝記』に様々な問題が含まれていると言ったが、中でも特に重要なのはグスコープドリが火山を（爆破して）誘発させる役目を志願するシーンについてである（火山の誘発は母国を寒気から救うために必要な行為）。彼の志願に対する周囲の反応から、また彼自身の台詞からそれが死を意味する行為であることが伺える。しかしなぜ彼の死とつながるのか、なぜ死を回避しつつ火山を誘発させることができないのか、これらについての説明がまったくなされていない。そのことによってこのエピソードが、まるで彼の人徳を際立たせるためだけに用意されたかのような、全体の流れとしては不自然な印象をもつこととなる。作品は「献身」というテーマで一貫しているが、ある意味では一貫させることにこだわあまり、主人公を不自然に死に急がせるような結果を招いてしまったといえるかも知れない。

『銀河鉄道の夜』における「献身」は他の乗船客を助けるために敢えて転覆した船に残った青年神父の一行と、カムパネルラの命がけの行為などを通して描かれている。ともに彼らの「献身」が「自己犠牲」に帰着する点で『グスコープドリの伝記』の場合と一致するが、その行動主が主人公のジョバンニでなかったことで異なる。そしてまたジョバンニは人々の幸せを願うものとしてグスコープドリと共通するが、仲間から不当に侮辱されている彼は「よだか」の

影を背負っていることも忘れてはならない。ここでは彼の持つ「暗さ」が大きく作用してしまっている。もし彼が自らの命さえも惜しまないと考えたとき、それは求道精神を突き詰めた結果と言うより、むしろ「負」の吸引力に取り込まれた結果と見るべきであろう（彼がカムパネルラとの別れによって「生」への求心力を著しく欠いたとは先にも述べた）。

『銀河鉄道の夜』は『グスコープドリの伝記』に比べて「負」の吸引力が強く作用している。そして「負」の吸引力に対抗する形で求道精神が発現する。先に私はこれを「ほんたうの幸せ」を探し求める者達の物語と言ったが、「負」の吸引力と求道精神との格闘が描かれている物語、と付け加えて言い直すべきかも知れない。しかしブルカニロ博士の削除からわかるように、ジョバンニの銀河旅行で得た体験の全てを求道精神に集約させる方向へ急ぎ足で進みかけたところで、賢治は作品を完成させることを断念している。もともと厳密に言えば、求道精神の矛先が自己犠牲へと向かいそうになるところで断念している。このことは賢治にとって自らの作品が持つ「負」の吸引力の超克がいかに難しかったかを物語っているのかも知れない。

また、断念した賢治は『グスコープドリの伝記』の中では主流だった（自己犠牲を根本とした）求道精神にある種の限界を感じていたのではあるまいか。『銀河鉄道の夜』が『グスコープドリの伝記』と異なり、幾度の改稿を重ねながらもついに日の目を見ることがなかった背景には、実はこのような理由があったのではなからうか。その意味で、自己犠牲的行為の結果として命を落としたのが主人公のジョバンニでなかったことは非常に意義深い。何故ならこのこと

によって、「よだかの影を負うなど」色々と問題がある彼の自己犠牲的精神が作品の主題となるのを避けることができるからであり、また「ほんたうの幸せ」を求めながらもグスコープドリ（正確に言うところではカムパネルラだが）とは異なる生き方を模索したかった賢治の潜在意識を感じ取ることができからである。それは、彼の中で芽生えた新たな「可能性」とでも言うべきものなのかも知れない。そしてそれは前項で述べた作品の持つ「いろいろ」な方向性ということと決して無関係ではない。

『銀河鉄道の夜』は作品の完成度という点からすると『グスコープドリの伝記』に比べて少なからず劣るところがあることは否定できないが、自らの発した「本当の幸せとは何か」という問いかけに対して自己犠牲でもって性急に答えることをやめた賢治の姿勢は大いに評価するべきではないだろうか。その意味でこの作品は『グスコープドリの伝記』から一步前進していると見なすことができるのである。

尚、本文の引用はちくま文庫『宮沢賢治全集5』8（それぞれ一九九一年から一九九四年にかけて重版）による。

（わだ やすとも・一九九五年卒）